

## 「研究者アーカイブズ」を考える

### 一歩き、読み、書いた二人の事例一

平野 泉\*

#### 要旨

研究者の活動が生み出す記録の総体＝研究者アーカイブズについて、研究者の没後にその行方を心配する声を耳にすることが多い。しかし学問・研究の記録は私たちが生きる社会の重要な一部をなしており、責任ある機関が適切に保存していく必要がある。そこで本稿では、研究者アーカイブズとは何か、またその保存についてどう考えたらよいのか、という点について、筆者の勤務する立教大学共生社会研究センターで所蔵する宇井純と鶴見良行のアーカイブズを事例として検討する。それらの事例を通して、研究者個人のアーカイブズがしばしば不完全なまとまりになりがちなこと、複数の時点で複数の人々による様々な評価・選別にさらされがちなこと、研究者の経歴または専門分野と関連性のあるアーカイブズ（機関）で保存されるのが望ましいこと、また、保存のためには活用の幅を広げていく必要があること、などを提示する。

#### キーワード

研究者アーカイブズ、宇井純、鶴見良行、収集基準、評価・選別

### 1. はじめに

#### 1-1. 「高齢世代が持つ研究資料の行方」<sup>1</sup>

一字井先生の膨大な資料の詰まった本棚は、ほくらからすると「宝の山」だ。

（家中茂、宇井先生と東大自主講座、水俣、そして地域研究所、沖縄大学地域研究所年報、2003、17号、p.19.）

「宇井先生」とは、水俣病をはじめ数々の公害・環境問題に取り組んだ宇井純（1932～2006年）のことだ。東京大学工学部都市工学科で助手を務めるかたわら、1970年から1985年まで東大構内で「自主講座」を開講し、公害被害者・市民・研究者が出会う場を開き、多様なネットワークの中心となった人物だ。1986年、沖縄大学法経学部に教授として迎えられ、1988年には同大地域研究所の初代所長に就任。同研究所にずらりと並んでいた全国各地の公害や住民運動に関する資料を、家中氏は「宝の山」と呼んだのである。そして2018年のいま、「宝の山」の大部分は立教大学共生社会研究センター（以下、「センター」と

いう。）の書庫におさまっている。どうして宇井の「膨大な資料」は、長年助手を務めた東京大学でもなく、多くの学生を育てた沖縄大学でもなく、立教大学にやってくるようになったのだろうか。

仮に「研究機関に研究者として所属して研究活動を行う人」を、ごく狭義での「研究者」とするならば、そうした研究者が日々の活動の中で生み出し、利用し、蓄積していく記録の総体（＝「アーカイブズ」）は、本来的には所属研究機関により管理・保存・公開されていくのが理想だろう。そうすれば、その研究者の活動や考えを、研究機関、学問分野、そして地域の文脈と歴史の中に位置づけて解釈し、理解しやすくなるからである。

とはいえ、思い通りにはいかない人生と似て、研究者のアーカイブズ（本稿では仮に「研究者アーカイブズ」と呼ぶ）もまた、アーカイブズ学が理想とする状態や方法で管理・保存されるとは限らない。研究者アーカイブズは「膨大な資料」になりやすく、著名な研究者だから保存されるというわけでもない。桑原武夫の蔵書、約1万冊の廃棄（京都市右京中央図書館）が問題になったことも、まだ記憶に

\*立教大学共生社会研究センター

新しい<sup>2</sup>。しかし研究者アーカイブズは、研究・学問という社会の重要な断面をドキュメントする貴重な資料でもあることも確かだ。それを残すためには、何をどう考えていったらよいのだろうか。また、どんな機関ががんばればよいのだろうか。

そこで本稿では、筆者の勤務先であるセンターが所蔵する研究者アーカイブズを手がかりとして、アーキビストの視点から「研究者アーカイブズ」について検討してみることにする。構成としては、本稿で用いる用語について次節で説明し、2章でセンター、およびセンターが所蔵する研究者アーカイブズの事例についてご紹介したうえで、事例から見えてくるいくつかの論点について3章で論じ、終章で全体をまとめることとした。

## 1-2. 本稿で用いる用語の整理

最初に、アーカイブズに関連して本稿で用いる用語や考え方について説明しておく。

まず「アーカイブズ」だが、国際アーカイブズ評議会 (International Council on Archives) の定義によれば、(1)「業務遂行の過程で個人又は組織により作成・収受されて蓄積され、並びにその持続的価値ゆえに保存された文書」、(2)「アーカイブズを保存し、閲覧利用できるようにする建物又は建物の一部」、(3)「アーカイブズを選別、取得、保存、提供することに責任をもつ機関又はプログラム」<sup>3</sup>を意味する。つまり、「アーカイブズ」の一語で、「文書(群)」そのもの、それを収蔵する「館」、そして「文書(群)」と「館」の管理・運営主体である「機関」の3つを意味することになる。そのため本稿では、「文書(群)」は「アーカイブズ」または「アーカイブズ(資料)」(後述)、「館」および「機関」は「アーカイブズ(機関)」と、用語を区別してみることにする。

また、ここでいう「文書」は、単に「書かれたもの」「媒体に固定されたもの」というだけではなく、人間がある役割(多くの場合、権限・裁量・資源を与えられて)を果たすべく日常的に行う活動の証拠として作成・保存される「記録」(record)である。したがってアーカイブズは、「主として文化遺産という観点からは定義されない」<sup>4</sup>ものである点が、図書や美術品との重要な違いである。

このことからアーカイブズは、それを作成した主体が適切に管理・保存し、時が来れば公開あるいは処分するのが基本形となる。例えばA県の行政文書のうち永続的価値を有

すると判断されたものを、A県立公文書館が保存・公開する場合がそうである。この場合のA県立公文書館は、「組織アーカイブズ(機関)」(organizational/institutional archives)であり、公文書館が県の各部署から文書を受け入れることを「移管」(transfer)という(所有権ではなく管理権限が移転)。一方、他の主体が作成・使用・保存していたアーカイブズを、何らかの基準で選択的に取得(acquire)する(寄託・借用の場合もあるが、多くは寄贈・購入など所有権の移転を伴う)ことを主たる機能とするアーカイブズ(機関)は、収集アーカイブズ(機関)(collecting archives)と呼ばれる。筆者が所属する立教大学共生社会研究センターも、戦後社会運動の記録を主たる収集対象とする収集アーカイブズ(機関)である。また公文書館や大学アーカイブズなどは、一つの機関で両方の機能を担っている(母組織の記録の移管を受けるだけでなく、組織外からの収集も行う)場合も多い。

また、本稿で「研究者アーカイブズ」という場合、研究活動そのものが生み出す記録に限らず、「研究者」である個人が、様々な活動を行うにあたり作成・収受・保存・利用する記録の総体を抽象的・理念的に指すものとする。近年急速な盛り上がりを見せている「研究データ管理」(Research Data Management)<sup>5</sup>の分野が対象とする「研究データ」も、研究者の活動が生み出すものとして、理念的には研究者アーカイブズの一部と考える。ただし実際には、研究活動に付随する様々なドキュメントはアーカイブズ(機関)が、研究データ(実験や社会調査の生データ)は研究データ管理を専門とする機関が担当する場合も多い<sup>6</sup>。そのため本稿では、ある研究者の活動が生み出す記録の総体について、理念として語る場合には「研究者アーカイブズ」、ある具体的かつ管理可能な記録のまとまりを意味したいときには「研究者アーカイブズ(資料)」として使い分けることとする。

## 2. 立教大学共生社会研究センターと「研究者アーカイブズ」

### 2-1. センターとは

センターは2010年4月に立教大学池袋キャンパス内に設立された機関で、「国内外における多様な市民の社会活動に関する資料を収集整理、保存、公開し、それに基づく実証研究を通じて、持続可能な共生社会の実現に資することを目的」<sup>7</sup>としている。しかし、センターは設立してからおもむろに収集活動を開始したわけではなく、コレク

ションの大部分は、1997年から埼玉大学経済学部社会動態資料センター（2001年から埼玉大学共生社会研究センター、2008年からは埼玉大学共生社会教育研究センター、これらを本稿では「埼大共生研」とする。）が収集し、広く市民に開いてきたものだ。2009年3月、埼玉大学と立教大学との間で交わされた覚書により、両大学が共同で管理することになったコレクションが、2010年から順次センターに移管されたのである。

センター所蔵資料は大きく二つに分けて考えるとわかりやすい。まず「市民活動コレクション」と呼ばれるミニコミ・機関誌類からなる資料群がある（約16,100タイトル、264,000点<sup>8</sup>）。これは現在も350ほどの団体・個人から継続的に寄贈を受けており、毎日郵便が届くたびに少しずつ大きくなっている。もう一つは、住民運動・市民運動体や運動に深く関わった個人の資料群、あるいは裁判資料といった「アーカイブズ」的な資料群である。例えば横浜新貨物線反対運動資料、「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）や救援連絡センターなど数々の運動に関わり、「模索舎」設立者としても知られる五味正彦（1946-2013年）旧蔵の資料、あるいは伊方原発行政訴訟資料などがある。

## 2-2. 二つの「研究者アーカイブズ（資料）」

上述の「運動に深く関わった個人」の中には、研究機関に所属し研究活動も行った二人のものがある。その二つの「研究者アーカイブズ（資料）」について簡単にご紹介しよう。

### 2-2-1. 宇井純公害問題資料コレクション（コレクションID：S07）

「はじめに」に登場した宇井純が沖縄大学を退官した2003年、同大地域研究所にあった「宝の山」が埼大共生研に移送された。これが「宇井純公害問題資料コレクション」（以下、「宇井コレクション」という。）の第1期受贈分である。当時埼大共生研助手だった藤林泰氏と家中氏が「鶴見良行さんをつうじて知り合い」<sup>9</sup>だったことが、寄贈のきっかけとなった。その後2006年に宇井は他界し、沖縄大学を去るときに自宅へ運び、ずっと手元に置いていた資料も、2008年にご遺族から受贈した。その全体が2010年にセンターに移管されたのである。2018年1月現在、整理が済んで公開されている分だけで新聞・雑誌記事スクラップ約170冊、件名ファイル約1,800冊、国内外のミニコミ



これが「宝の山」—宇井純公害問題資料コレクション@立教大学

機関誌等約1,200タイトル、ノート25冊、書簡類（非公開）約760点。未整理分を含むと書架延長は約159メートルに及ぶ。国内のみならず海外の環境問題に関する資料も多く、利用頻度の高いアーカイブズ（資料）である。

筆者は埼大共生研でパート職員として働いていたとき、同僚やアルバイトの学生とともに、このアーカイブズ（資料）の一点一点をデータベースに登録する作業をしていた。そして当時は、作業中のまとまりとご自宅にある分で「全部」なのだと思っていたのである。

しかしその後、沖縄大学で宇井に出会った三輪大介氏らの努力により、沖縄に残っている資料があることが明らかになった。最初に、宇井が中心となって活動していた「沖縄環境ネットワーク」の資料20箱が、恩納村の中西美佐子氏の手元にあることがわかる。それをきっかけとして、沖縄大学地域研究所にまだ残っている分があることや、沖縄県公文書館に保管された分があることなどが次々に判明した。そうした活動により全体で89箱の資料が集まり、沖縄大学の卒業生や職員が整理し、目録も公表している<sup>10</sup>。また、この作業を支えたプロジェクト「1970年代の反公害住民運動が蓄積した資料の整理・活用の道を探る」（トヨタ財団研究助成特定課題「助成金が活きたとは」2006・2007年度助成）の代表者である友澤悠季氏（現・長崎大学准教授）が、「宇井さんから資料を預かっている」という人に会い、その方と宇井本人の同意を得てセンターに資料が移管されるようはからってくださったこともある。また2013年には、日本アーカイブズ学会副会長だった石原一則氏（当時は神奈川県立公文書館勤務）から、栃木県の足尾で活動していた「わたらせ川協会」に「10年以上も

前「宇井純の東大自主講座のノート群が寄贈」されたという情報をいただいた<sup>11</sup>。その団体は解散したとのことで、詳細は不明のままである。おそらく現在も、宇井の人生と交錯したたくさんの人々の手元に、宇井の「研究者アーカイブズ」の一部や断片が残っているのだろう。

このように、宇井が大学に置いていたものを丸ごと受贈したように見えても、記録は宇井の活動と人脈に沿ってあちこち動き回っていたのである。このような場合、総体としての研究者アーカイブズは理念としてしか語れない。実際、具体的なアーカイブズ(資料)は、どんなに量が多くても、理念としてのアーカイブズの一部でしかない場合も多いのである。

## 2-2-2. 鶴見良行文庫 (コレクション ID : S09)

—5:00 マニラ帰着。6:00、ランディ邸へ。カーリーナ、ランディに旅行の報告。夕食後、かれらはどこかへ。私は提供されたウイスキーを飲みながら、これを認める。

(フィールドノート「ミンダナオ」、記入日:1982年9月22日～10月11日、p.75。鶴見良行文庫、資料ID:S09-ノート-15。文中の「ランディ」は、当時フィリピン大学第三世界研究センター長で、鶴見とバナナ研究を共にした社会学者、ランドルフ・ダヴィッドのこと)



鶴見良行が残したフィールドノートの一部

『バナナと日本人』(岩波書店、1982年)や『ナマコの眼』(筑摩書房、1986年)などの著作で知られる鶴見良行(1926～1994年)は、1989年に龍谷大学経済学部教授として着任した。ベトナム反戦運動の経験を機にアジアを歩くようになった彼は、文献を渉猟し、読んではカードに抜き

書きし、詳細なフィールドノートをつけ、カメラ3機で撮影した写真をアルバムに整理していた。鶴見が亡くなったのち、そうした資料を埼玉大共生研が受贈したのが2005年6月。これもまた、鶴見とともにアジアを歩いた藤林氏が埼玉大共生研にいたからこそ実現したことであった。「鶴見良行文庫」(以下、「鶴見文庫」という。)と名付けられたアーカイブズ(資料)は、埼玉大共生研と、鶴見の友人・知人が立ち上げた「鶴見良行文庫」委員会(代表・中村尚司氏(龍谷大学名誉教授))とが共同で保存・運営・公開してきたが、その全体を2012年3月にセンターが引き継いだのである。センターへの移送後、スペース不足のため箱詰めのまま保管していた資料全体を開封・配架したのは2015年3月になってからで、それをきっかけに未整理となっていた件名フォルダを整理・公開した。現在、東南アジア史などに関する図書約7,000冊、カード約15,000枚、件名フォルダ約300冊、ノート29冊などがセンターで利用可能となっている。書架延長は約158メートルで、偶然にも総量は宇井コレクションとほぼ同じである。また、アジアを主とする旅の写真約35,000枚、著作集索引、図書目録については「鶴見良行文庫デジタルアーカイブ」<sup>12</sup>からも検索・閲覧できる。

埼玉大共生研では、4万枚を超える写真のデジタル化、デジタルアーカイブの構築、フィールドノートのデジタル化などの様々な作業が行われた。筆者はそうした作業には関わっておらず、鶴見文庫に親しんだのは2015年にセンターで再開封してからだが、センターにあるものが鶴見の「アーカイブズ」の、少なくとも残存しているものの「総体」だと思っていた。

しかし、2016年10月にパートナーの鶴見千代子氏が他界された後、鶴見の自宅にまだ資料が残されていたことがわかる。藤林氏が京都の自宅に急行して「センターに行くべきもの」を選別。段ボール6箱分が2017年3月にセンターに搬入された。写真については全てデジタル化が済んだものと思っていたが、追加寄贈分には70冊ほどのアルバムも含まれていた。つまり鶴見文庫もまた、理念としての鶴見アーカイブズの一部でしかなかったのである。

また、2016年にはデータベースの更新作業も行われたが、その中で、被写体のプライバシーの問題があらためて提起され、検討・協議が行われている。件名フォルダを整理するなかで存在が確認された書簡類も、当面は非公開となっている。

このように、研究者アーカイブズには（どんなアーカイブズにも）様々な他者の生が織り込まれているので、公開・利用にあたっては様々な利害の調整が必要となる。また、研究者アーカイブズ固有の問題としては、例えば学生や研究の対象とした人々の人権、所属機関外での活動における守秘義務、あるいは研究助成主体との機密保持誓約の有無などが挙げられる。

### 3. 2つの事例を手がかりに、「研究者アーカイブズ」を考えてみる

#### 3-1. アーカイブズ（資料）は（往々にして）不完全である

前節の2事例のように、残存している具体的なアーカイブズ（資料）と理念的な「総体」とが一致していない場合、アーカイブズ（資料）の整理・公開にあたる担当者は、そのことを利用者にも伝えておかなければならない。アーカイブズ（資料）一点一点は、総体や他の資料との関係性の中で解釈されるので、利用者は「ここにあるのが全部かどうか」を知らねばならないからだ。また、一部でしかないことを否定的にとらえる必要もない。ただ、どこかに残っている他の部分とつながる可能性があるを意識することが大切なのだ。そうした「ここにはないもの」への意識は、アーカイブズ（資料）がつねに未知のつながりに向けて開かれたものであるという理解への導きとなるからである。

#### 3-2. アーカイブズは「評価」（appraise）・「選別」（select）される

一方で、理念としてのアーカイブズはあくまで理念であって具体物としては「存在しない」とも言える<sup>13</sup>。その理由の一つが、アーカイブズに様々な時点で様々な主体により加えられる価値の評価（appraisal）と、それに基づく選別（selection）である。

公式のルールに基づいて保存・廃棄が決まる公文書と異なり、個人アーカイブズでは、アーカイブズがどんどん成長している時期に何が生まれ、どんなものがどんな理屈で誰によって評価・選別され、廃棄されているかはわからない場合がほとんどだ。宇井コレクションも、鶴見文庫も、現時点での残存状況は、アーカイブズ（資料）が彼らの研究室にあったときとは異なるはずである。寄贈時の記録もないので、沖縄大学地域研究所、あるいは鶴見氏の自宅書

齋に全体として何がどのような状態であったのかについては、今となってはわからない。宇井コレクションについては、「配列を守ったまま丸ごともらった」はずだったが、実際には地域研究所に一部が残っていた。また東京大学から沖縄大学へ移送するときに、宇井氏自身が評価・選別して廃棄したものもあったかもしれない。鶴見文庫も同様で、龍谷大学に着任するため京都に家を構えたとき、あるいは大学を退官して資料を自宅へ移送する際に、鶴見本人が何らかの選別をしたかもしれない。また、千代子氏が他界された後の追加寄贈分については、藤林氏が現場で評価・選別したが、その判断の基準が文書になっているわけではない。

また個人アーカイブズの保存に関して、より決定的な選別の基準となるのが、収集アーカイブズ（機関）による、あるアーカイブズを「受け入れるか否か」という収集の基準である。しかしセンターの2事例が示すように、実際の収集活動は縁やタイミングに左右されることも多い。

そこで試みに、Times Higher Education（THE）の大学ランキング（日本・世界）のトップ10校について、アーカイブズ（機関）または大学内の収集アーカイブズ（機関）のウェブサイトをチェックし、「どんな研究者（所属教員）アーカイブズを収集しているのか」を確認した<sup>14</sup>。その結果と、何本かの関連文献の記述<sup>15</sup>とを重ね合わせてみたところ、収集の目安となるのはおおむね以下の点のようである（順不同）。

- A. 研究者本人が作成した、他にはない記録やデータか？  
（唯一性+権利関係の明確さ）
- B. 新しい研究を生み出す可能性があるか？（研究・教育上の価値）
- C. 大学の歴史、学問分野の歴史、地域の歴史にとって価値があるか？（歴史的価値）
- D. 研究者の個人史にとって価値があるか？（個人的価値）
- E. すでに所蔵している資料との関連性・補完性があるか？  
（コレクション形成への貢献度）

また、記録の内容としては、(a)研究関連の記録、(b)教育関連の記録、(c)大学の運営・委員会等の活動に関する記録、(d)学会活動の記録、(e)政府、地域社会、市民との協働に関する記録、(f)私的な（自伝的な）記録が重視され、形態としては、書簡やノート（研究・実験・講義）、日記、

手帳、草稿、写真、録音・録画など唯一性のあるものが主な収集対象となっている。書籍や学術誌、抜き刷りなど印刷されたものや、調査のためにコピーした資料などは引き取らない機関も多いようだ。

こうしてみると、宇井コレクション・鶴見文庫には、書簡や草稿など唯一のものも多いが、書籍やコピーされた資料など、収集対象外になりがちなものも大量に含まれている。もちろん書籍やコピーも役には立つのだが、何でも残せるわけでもないの、やはりこうした判断基準は大切だ。

じつはセンターも2011年4月に、運動当事者からの直接寄贈を原則とする、というシンプルな収集方針を定めた。その方針に従えば、宇井はまだしも、鶴見文庫の寄贈を今打診されたら、お引き受けできなかった可能性もある。そう考えると、埼玉大共生研がこれらの資料群を収集していたのはセンターにとって幸運なことだった。しかし研究者アーカイブズ(資料)保存の将来像を描くとしたら、「残すべきもの」を評価・選別する(悩ましくもある)基準の精緻化をめざしていく必要があるだろう。

### 3-3. 研究者アーカイブズ(資料)を所蔵する機関はいろいろである

では、研究者アーカイブズはどんな機関に所蔵されているのだろうか。

#### A. 研究者が所属する(していた)機関

研究者アーカイブズの保存で大きな役割を果たしているのは、なんといっても大学・研究機関のアーカイブズ(機関)や図書館である。もちろん大学アーカイブズ(機関)の本務は大学本体の運営記録の管理なので<sup>16</sup>、研究者アーカイブズは図書館や博物館が担当している場合もあるが<sup>17</sup>、やはりこの形が基本形だといってよいだろう。研究者が経歴上複数機関で勤務したためアーカイブズが物別れになった場合でも、所蔵情報さえオープンに共有されていけば問題にはならない。

例:

梅棹忠夫アーカイブズ(国立民族学博物館)

<http://nsearch.minpaku.ac.jp/umesao-archives/index.html>

ノーム・チョムスキー・アーカイブズ(Massachusetts Institute of Technology Libraries, Institute Archives and Special Collections)

<https://libraries.mit.edu/chomsky/>

#### B. 専門分野の収集アーカイブズ

研究者として、大学よりも専門分野への帰属意識が強い人も少なくない。そうした人は分野ごとの収集アーカイブズ機関を好むようだ<sup>18</sup>。

高エネルギー加速器研究機構(KEK)史料室

<http://www2.kek.jp/archives/about/index.html>

American Institute of Physics, Niels Bohr Library & Archives

<https://www.aip.org/history-programs/niels-bohr-library>

#### C. 研究者個人の資料館・博物館

遺族や弟子・研究仲間、あるいは縁のある自治体などが「館」を設立するケース。

例: 中谷宇吉郎 雪の科学館 [http://kagashi-ss.co.jp/yuki-mus/yuki\\_home/](http://kagashi-ss.co.jp/yuki-mus/yuki_home/)

#### D. 所属とは関係のない研究機関が所蔵:

センターの2事例もこれに該当する。所蔵に至る経緯はそれぞれ多様だろう。

例:

丸山眞明文庫(東京女子大)

<http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/shoko/>

ミシェル・フーコー文庫(IMEC)

<http://www.imec-archives.com/fonds/foucault-michel/>

#### E. 公立・私立の図書館・博物館・文書館

研究者の出身地・居住地など何かしら縁のある地域のMLA、という場合が多そうではあるが、あくまで推測である。

例: 櫻井徳太郎文庫(板橋区立公文書館) [http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c\\_kurashi/000/000982.html](http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c_kurashi/000/000982.html)

まだ他にも可能性はありそうにも思えるが、例えばこの5種の機関の中では、どれが研究者アーカイブズ保存に最も適した機関といえるだろうか。第一に、研究者アーカイブズの整理・活用にあたる担当者に、研究者と同じ専門分野の知識があることは必須とはいえないまでも、あれば大いにプラスになることも確かだ<sup>19</sup>。第二に、アーカイブズ(資料)の量と内容を考えると、組織的に安定していて人員・財源・スペースなどを十分に確保できる機関が望ましい。第三に、アーカイブズ(資料)の受け入れ決定にあたっては「なぜこれを残すのか」を機関内で正当化できなければならないが、研究者アーカイブズの所蔵を正当化しやすい

のは、やはり研究者個人・研究活動との関連性が強い機関だろう。とすれば、やはり上記の A か B だと思われる。つまり、研究者アーカイブズをもっと保存し、社会に開くためには、研究機関や専門分野に根を持つアーカイブズ(機関)の数を増やす、あるいはそうした機関の基盤をさらに強化していくのが(茨の道ではあっても)最も近道なのではないだろうか。

### 3-4. 研究者アーカイブズ(資料)の使われ方はいろいろである

当然のことながら、どんな風に使われるかをイメージできるアーカイブズは、保存も正当化しやすい<sup>20</sup>。研究者アーカイブズ(資料)は、やはり研究者の個人史、各学問の歴史、所属機関の歴史など、歴史的関心から用いられることが多いようだ。センターでも、鶴見文庫は個人史的な関心から利用されている。鶴見の特定の著作、例えば『バナナと日本人』執筆にあたってフィリピンで調査した際のフィールドノートが見たい、あるいは「ベ平連」と鶴見の関わりがわかる資料を見たいという利用者がほとんどなのである。また鶴見の研究の「方法」が見えるノートや写真を、「フィールドワークや調査方法の教育に使えないか」と考えている教員もいる。

しかし、宇井コレクションの使われ方はそれとは異なる。宇井は、世界中の反公害・環境保護運動とネットワークするなかで入手した資料を大量にファイルし、蓄積してきた。そのため一般にあまり知られていないような公害や環境汚染の事例についても、うまくすればかなりの資料が、そうでなくても何らかのきっかけになる資料が見つかる可能性が高い。また宇井は60年代後半以降の様々な市民運動ともつながっていた。例えばベ平連の活動から生まれたアジア太平洋資料センターの設立準備期の資料で、ベ平連資料(S01)にはないものが宇井のファイルにあったりする。とにかくカバー範囲が広いので、汎用性も高いのである。その反面、「この資料があってよかった」と喜ぶ利用者が、宇井純が誰かを知らないことも多い。

宇井が東京大学で15年間開講した自主講座が「全国の公害反対運動の情報センター」の役割を果たしており、沖縄大学の地域研究所にも『「自主講座」の雰囲気濃厚に漂っていた』<sup>21</sup>ことを考えると、宇井コレクションの少なくとも自主講座関連部分には、もともと開かれた、誰でも

使えて誰にでも役立つライブラリー的な要素があるのだろう。それに対して鶴見文庫は個人アーカイブズの性格が強いので、利用者も鶴見その人への関心が入り口となるのかもしれない。

### 3-5. 「現場主義」(宇井)と「歩く学問」(鶴見)

先ほど引用した鶴見のフィールドノートの文章に「ランドディ」として登場する、フィリピン大学名誉教授ランドルフ・ダヴィッドは、2015年7月3日に立教大学で行われた公開講演会で、次のように語っている。

「鶴見自身は、私が初めて彼にあったときから、「ジャーナリスト」としてのアイデンティティを意図的に自らに与えていたようです。実際、彼は大学に所属する研究者に対しては批判的なようでした。あとになって初めて、日本では「ジャーナリスト」という言葉が、ある人が実際に何をしているかではなく、むしろ、鶴見のような人を仲間と認めない「学者」たちの排他性についてこそ、多くを語っているということに私は気づきました。」<sup>22</sup>

鶴見と親交の深かった彼が語るとおり、鶴見は一時期まで「ジャーナリスト」を自認しており、アカデミズムに対して批判的でもあった。そして宇井もまた、東京大学を典型とする大学は「公害の激化を助け」「民衆を抑圧・差別する道具となって来た」とし、彼が主催した自主講座「公害原論」を、「立身出世のためには役立たない学問」「生きるために必要な学問の一つ」と規定した<sup>23</sup>。宇井はまた、自らのことを「一技術者」として語ることも多かった<sup>24</sup>。そして二人は何より、現場を歩き、人と会い、自分の頭で考え、誰にもわかりやすい言葉で書くことを大切にしていた人だった。もちろん二人ともすぐれた研究者であり、彼らのアーカイブズ(資料)からは研究への情熱や知ることの興奮が伝わってくる。しかし同時に、彼らの書いたものからは「アーカイブズはいいから、まずは自分の足で歩き、自分の目で見えてきたら?」という声も聞こえてきそうだ。「ごっそり詰まった本棚に囲まれ、紙の山に占拠された机で書き物をする研究者」というステレオタイプからの距離が、二人のアーカイブズ(資料)を「研究者アーカイブズ」と呼ぶことをためわらせるのである。

その一方で、そうした「学縁(がくぶち)」(=「制度を

通じた知の区分<sup>25</sup>にはおさまり切らない二人だからこそ、かえって彼らのアーカイブズ(資料)が研究機関で保存される意味もあるのかもしれない。研究者だけではなく市民にも開かれたリソースとして、学知を生み出す空間のど真ん中から既存の知のありようを問い返す「潜在力を秘めている」<sup>26</sup>からである。

#### 4. おわりに—結論ではなく

本稿では、研究活動が生み出すアーカイブズについて、それがどんなもので、どのように保存されるのかを、具体的な事例をもとに検討してみたが、筆者は研究者アーカイブズを専門とするわけではなく、力量不足を露呈することとなった。その点はお詫びするしかない。ただ、それでも何か見えてきたことがあるとしたら、以下のような点だろうか。

まず第一に、そもそも研究者の活動が生み出すアーカイブズというものを、どう定義し、考え、取り扱うのか、という問題がある。研究者という個人のアーカイブズには公的な記録も私的な文書も、研究者自身のプライバシーも他者の個人識別情報も含まれる。紙に書かれたものも、デジタルの動画も、プログラムやデータベースもある。権利処理や公開、長期保存にまつわる多くの実務的な課題の解決を視野に入れた議論が深まることを期待したい<sup>27</sup>。第二に、誰のものを残すのか、何をどこまで残すのか、という評価・選別の問題がある。これについては、各機関の収集／評価・選別基準を持ち寄ってオープンに議論する場などがあればと思う。第三に、誰が保存するのか、という問題がある。アーカイブズ(機関)が自由にできる資源は限られており、また研究者は複数の機関を渡り歩くことも多い。だからこそ、機関同士がつながり、支え合う仕組みが必要だ。そうした仕組みを作ることで、ある人のアーカイブズは稀少性のないものも含めて丸ごと保存され、ある人のアーカイブズは唯一無二のものも含めて丸ごと廃棄されてしまう現状を少しでも良い方向に変えていけないものだろうか。第四に、第三の点とも関連するが、研究者アーカイブズ(資料)を所蔵する機関が所蔵情報を共有できるプラットフォームの必要性が挙げられる。それぞれの機関が、ある特定の研究者のものとして所蔵しているアーカイブズ(資料)は全体の一部かもしれない。他の部分の存在に気づくためにも情報共有のための場や手段が必要だろう。最後に、研究者アーカイブズ(資料)の活用という課

題がある。研究者アーカイブズ(資料)は、そのコンテンツ自体のおもしろさはもとより、調査・研究の方法論、あるいは研究者の倫理などの教育にも活かせるはずだ。伝統的な閲覧や展示などに加えて、例えば大学の学部教育等で研究者アーカイブズ(資料)を活用するための様々な知恵を出し合える場があればと思う<sup>28</sup>。

研究者アーカイブズ(資料)を保存するために人々が動くとき、アーキビストの役割を担う人がそれを整理するとき、あるいは「問い」を抱いた誰かがそれを読むとき、そうした人々の誰もが、アーカイブズという織物に織り込まれていく。宇井や鶴見のアーカイブズの「行方」を思い行動した家族も、家中氏や藤林氏、三輪氏や友澤氏も、筆者も利用人も、すでに宇井コレクションや鶴見文庫の一部となっている。その意味で、整理され利用されるアーカイブズは、様々な人々の活動や解釈を次々に織り込むことで永遠に織り続けられる織物のようなものだ。しかし整理も利用もされないアーカイブズは、「死んだ人間の知的道程のホコリにまみれた痕跡」<sup>29</sup>として書庫で眠り続けることになる。社会のそこそこにある研究者アーカイブズ(資料)を、それぞれに个性的で美しい織物にしていくにはどうしたらよいか。この問いを共有する多くの人々と、これからも語り合っていければと思う。

#### 註

<sup>1</sup> 筆者は2017年9月17日、埼玉大学で開催された日本社会教育学会・第64回研究大会2日目、瀧端真理子氏によるラウンドテーブル(10)「研究の記録管理と資料保存」で、エル・ライブラリー館長の谷合佳代子氏とともに報告を行った。この「高齢世代が持つ研究資料の行方」は、ラウンドテーブルの内容についてやりとりしたメールで出てきた言葉(2017年6月7日付、瀧端氏よりのメール)である。当日の報告は研究の「記録」管理(=現在進行形の研究が日々生み出す様々な記録をどう管理するか?)、研究者の「アーカイブズ」(=個々の研究者や研究プロジェクトが生み出す記録を、どう社会の中で保存・活用していくか?)について、海外の動向も踏まえて検討する、という内容のものであった。しかし文章化するには未消化に過ぎるように思われ、本稿は報告内容を踏まえつつも、筆者の実務経験に引きつけて書いてみたものである。

<sup>2</sup> 大谷卓史。過去からのメディア論 図書館における寄贈本の受難: 学術資料としての可能性とその限界。情報管理。



- 2017, 60(4), pp. 279-283. DOI :<https://doi.org/10.1241/johokanri.60.279>
- <sup>3</sup> International Council on Archives. Multilingual Archival Terminology. Archives. <http://www.ciscra.org/mat/>
- <sup>4</sup> エリック・ケテラル, 未来の時は過去の時のなかに, アーカイブズ学研究, no.1, 2004, p.9.
- <sup>5</sup> 倉田敬子・松林麻実子・武田将季. 日本の大学・研究機関における研究データの管理、保管、公開 - 質問紙調査に基づく現状報告. 情報管理, vol.60, no.2, 2017, pp.119-127.DOI: <http://doi.org/10.1241/johokanri.60.119> など。
- <sup>6</sup> 例えば京都大学情報環境機構の研究データ保存サービスの試みなど. <http://www.iimc.kyoto-u.ac.jp/ja/whatsnew/information/detail/160318053522.html>
- <sup>7</sup> 共生社会研究センター規則、第2条. <http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/rcccs/qo9edr0000005nsn-att/rcccsregulation.pdf>
- <sup>8</sup> 2018年1月23日現在の数字。
- <sup>9</sup> 家中茂 宇井先生と東大自主講座、水俣、そして地域研究所. 沖縄大学地域研究所年報. 17, 2003, pp.19-20. <https://ci.nii.ac.jp/naid/110000486503>
- <sup>10</sup> この間の経緯、および資料目録は「1970年代の市民・住民運動が蓄積した資料の整理活用の道を探る」刊行委員会. 1970年代の市民・住民運動が蓄積した資料の整理・活用の道を探る—資料のもつ代替不可能な価値を活かすために—. 同委員会. 2009、を参照されたい。
- <sup>11</sup> 2013/11/29 付、石原一則氏より筆者あてのメール。
- <sup>12</sup> <http://tsurumi.rcccs.rikkyo.ac.jp/>
- <sup>13</sup> 例えば、Millar, Laura. The Death of the Fonds and the Resurrection of Provenance: Archival Context in Space and Time. *Archivaria*, 53, 2002, p.6. <https://archivaria.ca/index.php/archivaria/article/view/12833-14048>
- <sup>14</sup> THE のランキング日本・世界のトップ 10、および参照した URL は以下の通り。  
THE 世界大学ランキング日本版 (2017年7月19日時点) <https://japanuniversityrankings.jp/rankings/total-ranking/>  
\* 以下各館 URL は、特にページタイトルを記していない場合はトップページのものである。
- 1) 東京大学文書館. [http://www.u-tokyo.ac.jp/history/index\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/history/index_j.html)
  - 2) 東北大学史料館. 史料館概要. <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/gaiyo.html>
  - 3) 京都大学大学文書館. 大学文書館について. <http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/about.html>
  - 4) 名古屋大学大学文書資料室. 資料提供のお願い. <http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/about/shiryo.html>
  - 5) 東京工業大学資史料館. <http://www.cent.titech.ac.jp/pg1166.html>
  - 6) 大阪大学アーカイブズ. 大阪大学アーカイブズについて. [http://www.osaka-u.ac.jp/ja/academics/ed\\_support/archives\\_room/introduction](http://www.osaka-u.ac.jp/ja/academics/ed_support/archives_room/introduction)
  - 7) 九州大学・大学文書館. 大学関係資料について. <http://www.arc.kyushu-u.ac.jp/data/about.html>
  - 8) 北海道大学大学文書館. 概要. [https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/about\\_us.html](https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/about_us.html)
  - 9) 筑波大学アーカイブズ. アーカイブズについて. [https://archives.tsukuba.ac.jp/about\\_archives/](https://archives.tsukuba.ac.jp/about_archives/)
  - 10) 早稲田大学大学史資料センター. 資料収集業務に関わる内規. <https://www.waseda.jp/culture/archives/assets/uploads/2015/03/shushunaiki.pdf>
- THE 世界大学ランキング (2017年7月19日時点) [https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2017/world-ranking#!/page/0/length/25/sort\\_by/rank/sort\\_order/asc/cols/stats](https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2017/world-ranking#!/page/0/length/25/sort_by/rank/sort_order/asc/cols/stats)
- 1) University of Oxford, Bodleian Library Special Collections, Weston Library, Collection Development Policy: Special Collections. <http://www.bodleian.ox.ac.uk/weston/about-us/policies/sc-collection-development>
  - 2) California Institute of Technology, The Caltech archives, Donate & Transfer Materials. <http://archives.caltech.edu/about/donating.html>
  - 3) Stanford University Special Collections & University Archives, Faculty. <https://library.stanford.edu/spc/university-archives/transferring-your-records/faculty>
  - 4) University of Cambridge Library, Collection Development Policy Framework. [http://www.lib.cam.ac.uk/CDP\\_framework.pdf](http://www.lib.cam.ac.uk/CDP_framework.pdf)
  - 5) Massachusetts Institute of Technology, MIT Libraries, Institute Archives and Special Collections, Collection Policy for Archives and Manuscripts, 1980. <https://libraries.mit.edu/archives/managing/policy-collection1980.html>
  - 6) Harvard University Archives, What We Collect. <http://library.harvard.edu/university-archives/what-we-collect>
  - 7) Princeton University Archives, Transfer or Donate Records to the University Archives <http://rbcs.princeton.edu/services/transfer-or-donate-records-university-archives>
  - 8) Imperial College London, College Archives and Corporate

Records Unit

<https://www.imperial.ac.uk/admin-services/acru/collegearchives/>

9) Swiss Federal Institute of Technology, Zurich

<http://www.library.ethz.ch/en/Resources/Archival-holdings-documentations/ETH-Zurich-University-Archives>

10) University of California, Berkeley, UC Faculty Papers: Identification and Appraisal.

<http://libraries.universityofcalifornia.edu/content/uc-faculty-papers-identification-and-appraisal>

同点10) University of Chicago, University Archives, Donating Faculty Papers.

<https://www.lib.uchicago.edu/scrc/archives/donatefaculty/>

<sup>15</sup> 参照した文献は次の通り（発表年代順）。

Brichford, Maynard J. University Archives: Relationships With Faculty. *American Archivist*. 1971, vol.34, pp.173-181 ; Honhart, Frederick. The Solicitation, Appraisal and Acquisition of Faculty Papers. *College and Research Libraries*. 1983, 45, pp. 236-241 ; Burckel, Nicolas C. and J. Frank Cook, A Profile of College and University Archives in the United States. *American Archivist*. 1982, vol.45, pp.410-428; Haas, Joan K., Helen Willa Samuels, Barbara Trippel Simmons. *Appraising the Records of Modern Science and Technology: A Guide*. Massachusetts Institute of Technology, 1985; Fournier, Frances. 'For they would gladly learn and gladly teach'- University Faculty and Their Papers: A Challenge for Archivists. *Archivaria*. 1992, 34, pp.58-74; Hyry, Tom, Diane Kaplan, and Christine Weideman. "Though This Be Madness, yet There Is Method In 't': Assessing the Value of Faculty Papers and Defining a Collecting Policy. *American Archivist*. 2002, vol.65, pp.56-69; Laver, Tara Zachary. In a Class by Themselves: Faculty Papers at Research University Archives and Manuscript Repositories. *American Archivist*. 2003, vol.66, pp. 159-196.

<sup>16</sup> 寺崎昌男. 大学アーカイヴズ (archives) とはなにか. 東京大学史紀要. 1983. no. 4, p.2; 上記注 (15)、Fournier (1992), p.59.

<sup>17</sup> 2017年7月23-29日、オレゴン州ポートランドで開催されたアメリカ・アーキビスト協会では筆者が出会ったハーバード大学ピーボディ博物館のアーキビストは、ある文化人類学者のアーカイブズについて、ハーバード大学アーカイブズの収集基準で収集決定後（研究者アーカイブズの収集判断は大学アーカイブズの専決事項）研究に関する部分だけはピーボディ博物館で所蔵することになったと話していた。個人のアーカイブズが物別れになるのは

望ましいことではないが、館の専門性、保存、利用可能性といった複数の観点から協議した結果だという。

<sup>18</sup> 上記注 (15)、Fournier (1992), p.64 ; Laver (2003), p.161.

<sup>19</sup> 小長谷有紀. ウメサオタダオが語る、梅棹忠夫—アーカイブズの山を登る. ミネルヴァ書房、2017.

<sup>20</sup> 「研究者アーカイブズは量ばかり多くて利用されない」というアメリカのアーキビストの認識について、上記注 (15)、Laver (2003), p.167 は自らの調査に基づき、「研究者アーカイブズは必ずしも研究者以外のアーカイブズに比べて量が多いわけではない」と報告している。

<sup>21</sup> 本文 p.1 の引用文に示した家中 (2003), p.19.

<sup>22</sup> ランドルフ・ダヴィッド. フィリピン社会の現在—鶴見良行を基点として—. 立教大学共生社会研究センター主催公開講演会講演録).

<http://hdl.handle.net/11008/1333>, 2015, p.6.

<sup>23</sup> 宇井純. 開講のことば. 東大工学部助手会 公開自主講座実行委員会. 公害原論 (1). 1970年, 表紙裏. 宇井純公害問題資料コレクション (S07-704023)、立教大学共生社会研究センター.

<sup>24</sup> 例えば、宇井純. 一技術者の自己変革. 藤林泰他編. 宇井純セレクション (3) 加害者からの出発. 新泉社, 2014, pp.69-86.

<sup>25</sup> 勝俣誠. 西アフリカの村から. 鶴見良行著作集月報. すず書房. 1999, 第5号, p.2. 勝俣氏はセンター所蔵の反アパルトヘイト運動資料 (R09-10) とも関わりが深い。

<sup>26</sup> 平野泉・高木恒一. 市民アーカイブズとアカデミズム. ARENA. 2015, vol.18, p.8.

<sup>27</sup> とくに、ボーン・デジタルの研究データ管理との関連では今後様々な課題が出てきそうに思える。

<sup>28</sup> 例えば、アメリカ・アーキビスト協会には「レファレンス、アクセス、アウトリーチ部会」内部に「一次資料を使った／一次資料についての教育委員会」(Teaching with/about Primary Sources Committee)があり、図書館界とも連携して活発な活動を展開している。

<https://www2.archivists.org/groups/reference-access-and-outreach-section/teaching-without-primary-sources-committee>

<sup>29</sup> 上記注 (22)、ダヴィッド (2015), p.10.

\*本文および注に示したURLは、THEのランキングを除いて2018年1月30日最終確認。